

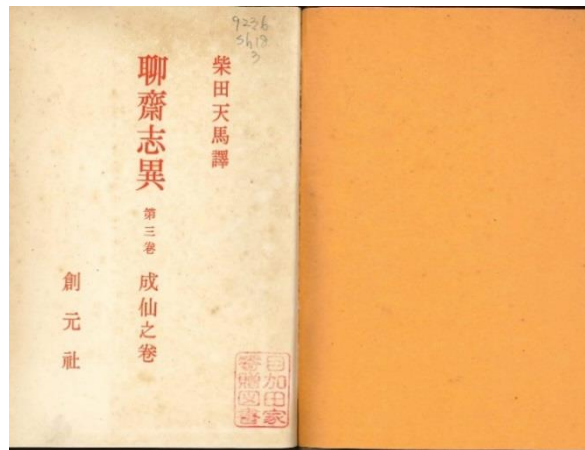
目加田誠先生と中国文学 3

— 『聊齋志異』 3 —

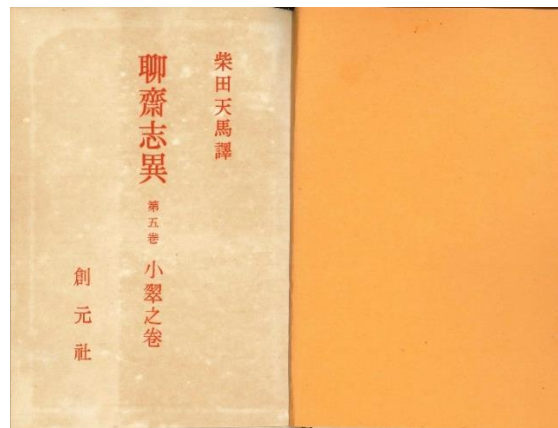
清代の怪異小説『聊齋志異』をご紹介します。目加田誠先生が高校三年生だった時のこと、柴田天馬氏訳の『聊齋志異』がとても気に入って、大学で中国文学（当時は支那文学と言っていた）を選ぶきっかけとなったとも言えるとされているのが取り上げる理由です。

今までに「西湖主」・「八大王」・「画壁」をご紹介しますでしたが、今回は「嬌娜（きょうだ）」と「勞山道士」を取り上げます。柴田天馬氏訳の創元社版では第3巻と第5巻に、岩波文庫版では上巻の第11話と第9話にそれぞれ「美女と丸葉」・「仙術修行」という副題がついて採録されています。

柴田天馬訳
『聊齋志異』
第三巻とびら
株式会社創元社
昭和 26 年



柴田天馬訳
『聊齋志異』
第五巻とびら
株式会社創元社
昭和 26 年



【嬌娜】

孔雪笠（こうせつりつ）は孔子の末裔です。おだやかな性格で詩を作ることが得意でした。他県に住む友人から誘いの手紙をもらって出かけてみると、その友人は亡くなっていました。お金も無く帰ることができなくなって、お寺に雇ってもらってようやく暮らしていました。

ある日孔はお寺の近くの空家の門の前で若者に会いました。その若者から誘いを受けて中に入ると、造りの立派な家でした。二人で話していると、若者はこの屋敷の主人ではなく、借家人でした。そして孔の身の上にすっかり同情して、弟子にしてほしいと頼むのでした。

その夜孔は泊めてもらいましたが、翌朝起きると白髪の老人が入ってきて、息子を指導していただいているとお礼を言いました。老人は若者の父でした。夜宴会の時、若者は知り合いの女性を呼びますが、絶世の美女でした。孔は若者に勉強を教えますが、教える前に若者が書いた文は皆古風なものばかりでしたが、教え始めると目を見張るような文章を書くようになりました。二人は5日に一度は酒を飲み、いつも同じ女性を呼びました。

そんな生活をしていましたが、ある日孔の胸に大きなはれ物ができ、どんどん大きくなりました。困った若者は妹の嬌娜を呼びます。彼女は目元涼しげな娘で、はれ物を切り取り、口から紅い玉を出して切り口の上で3回まわすと治ってしまいました。孔はその娘が忘れられず読書にも身が入らなくなってしまいました。若者はそれを見ていとこの娘との結婚を勧めました。孔は受け入れて結婚しました。

しばらくして若者が言うには、家の持ち主が帰ってくるので、引っ越さなければならないことになりました。孔は若者に付いていきたいと思いましたが、若者が孔の郷里に連れて行くと言って孔夫婦の手を取ると、空を飛んで帰り着きました。この時初めて若者が人間でないことがわかりました。母親は孔が美しい嫁を連れて帰ってきたので喜びました。

【労山道士】

王（人名）は旧家の七男で、若い時から道教を学んでいましたが、労山には仙人がたくさんいると聞いて出かけました。労山に着いて山の頂上に登ってみると、古い道観（道教のお寺）があって、ひとりの道士が座っていました。いかにも神々しい姿だったので、弟子入りをお願いしたところ、道士に「おまえはひよわだから辛抱できないだろう」と言われました。王は「できます」と言って弟子になりました。

翌朝、王は斧を与えられて兄弟子たちとともに薪を取ってくるように命じられました。一月あまりするうち、手足にあかぎれができて、家に帰りたと思うようになりました。ある夕方、道士は二人の客と酒を飲んでいました。日が暮れても明かりもつけずにいましたが、道士は紙を丸く切って壁に貼り付けました。すると月に変わって輝きだしました。それから皆にお酒を注ぎだしました。酒壺は一本なのに、何杯飲んでも酒はなくなりません。そして客の一人が「なぜ月の仙女を呼ばないのだ」と言って箸を月に投げると、ひとりの美人が出てきて舞を舞い、歌を歌いました。歌い終わると、また箸に戻りました。三人は「今夜は楽しかった」と言って月の中に入ってしまいました。

しばらくして暗くなってきたので、弟子たちが灯りを付けると、道士がひとりで座っているばかりでした。王はそれを見てしばらく居ることにしましたが、薪採りばかりなので、苦しくなって家に帰ることにしました。そのことを道士に伝え、これだけ苦勞したから壁を抜ける術を教えてほしいと頼みました。道士は笑ってその術を教えてくださいました。王は家に帰って女房にそのことを言っても、女房は信じません。それで王は勢いをつけて壁に向って駆け込みましたが、壁に頭をぶつけて倒れてしまいました。頭には大きなこぶができ女房は笑うばかりなので、王は「おいぼれ道士め」とののしりました。

二話とも不思議な話ですね。「嬌娜」では、異界に住む娘と現実世界に住む孔氏が結ばれ、孔氏の母親は息子が美しい嫁を連れ帰ったことを喜びます。「労山道士」では、主人公の王氏は道教を学んでいますが、短時間で道教の術を教えてもらえると思い、妻の前で醜態をさらすことになってしまいます。少し教訓的な内容です。